

価値観と価値感

心理学助教授 佐方 哲彦

このごろカチカンを価値「観」ではなく価値「感」と書く学生が非常に多い。半数以上が価値「感」と書いている印象がある。レポートなどで文章中に価値「観」という言葉を使おうとしているときに、たぶん価値「感」と書いていても違和感がないし、それがむしろ当たり前のように思えて、読み返しても気づかないのであろう（書きっぱなしで読み返すことすらしていない可能性もあるが…）。

それは単なるケアレスミスというよりも、今時の青年たちのこころ模様の反映なのかもしれない。つまり、いまや価値「観」は価値「感」へと変容してしまい、彼らにとって価値は、「感 kan」じるものであっても、「観 kwan」じるものではなくなったのであろう。「感」は、どちらかといえば受動的であり、好き嫌いのレベルで直感的に受け取っているという意味合いが強い。一方、「観」には、ただ単に「目に入るものを見る」のではなく、「念を入れて気をつけながら見る」という意味があり、そこには能動的で主体的なこころの営みがある。価値「感」には、自分で考え判断することを停止し、自らの価値を主体的、創造的に見出したり選択することを放棄してしまった受け身的な「マニュアル人間」「指示待ち人間」の姿が映し出されているように思われる。

人と対話していて考えが対立すると、ただ単なる好みの相違を「カチカンがちがう」と表現するのと同じレベルで、「あなたとはカチカンがちがうから」で済まそうとしていないだろうか。そのとき、まさに感じ方（価値「感」）の違いを直感と主観で言っているだけで、自分なりの見方や考え方（価値「観」）を表明することを避けていることが多いはずである。「カチカンがちがう」と言ってしまうえば、こころの葛藤を回避して嫌な思いをしなくて済むけれども、それ以上の相互コミュニケーションは成り立ちにくくなる。

多様な価値を「感 kan」じる感受性は必要であるけれども、やはり「観 kwan」じることを欠いてはならないであろう。自己韜晦することなく、自分の価値「観」をしっかりと持つように心がけてほしいと思う。